

26 日本におけるテリアアカの受容

中村 輝子・遠藤 次郎

江戸時代に翻訳されたテリアアカの処方も多くは、その原方が何であるかが記されていない。しかしながら、原方が記されている僅かな例を頼りにすると、もとの薬物をどのように訳したかがわかる。本報告では、テリアアカの中で薬味が少なく、また、最も後の時代にまで生き続けた「四味のテリアアカ（テリアアカ・ディアテッサロン）」を中心に、日本におけるテリアアカの受容を検討したい。

藤林普山は『西医今日方』（一八四七年）の中で「小テリアアカ、一名テリアアカ・チャテッサロン」を「龍胆、蝮蛇（若クハ青木香）、ラウリイル実、没薬」と記している。これを原方と比較すると、①ゲンチアナを龍胆に、② *Aristolochia rotunda* を蝮蛇（もしくは青木香）、③月桂樹（*Laurus* sp.）の果実をラウリイル実、④ミルラを没薬、と訳していることがわかる。③と④の訳については全く

問題はなく、また、①に関して、ゲンチアナと龍胆はともにリンドウ科に所属する苦味性を有する生薬であることから、龍胆をゲンチアナの代用薬にすることは妥当である。さらに、②の附註にある *A. rotunda* を青木香に当てることについても、青木香の原植物は今日でも *Aristolochia*（ウマノスズクサ）属植物であることから、穏当な翻訳といえる。これに対して、問題となるのは、*A. rotunda* を蝮蛇（マムシ）としている点であろう。ウマノスズクサ属の一部のものが *snake root* と呼ばれることに由来する誤訳ともとれるが、青木香という代用薬を知りながらも蝮蛇を当てたことについては、何らかの意図を感じざるを得ない。*A. rotunda* を蝮蛇と翻訳したのは、普山が初めてではない。『西医今日方』以前の医書と推定される『底野迦方』（京都大学富士川文庫）中にみられる四味のテリアアカの蝮蛇も、*A. rotunda* の訳と推察される。本書には四味からなるテリアアカが八例ほど収載されているが、それらについて、*A. rotunda* の訳に注目すると、二例が蝮蛇、四例が（土）青木香であり、馬兜鈴（ウマノスズクサ属植物）ならびに草薺（ヤマノイモ科オニドコ

口などが各一例である。これらについては中国の本草書でも解毒作用を記している。

四味のテリアカに限って言えば、*A. rotunda*を蝮蛇に当てる例は極端に多くはないものの、『底野迦方』に記されている全処方、二四処方中、蝮蛇(反鼻)を用いる例が一五処方にもほのぼの点は注目に値する。

江戸時代の初めから江戸末に至る主要な医書に見られるテリアカの処方を蒐集した赤松金芳氏の報告(日本医事新報、一九三四)を見ても、六一処方中の五〇処方のテリアカにマムシが配合されていることがわかる。

以上のことを考慮すれば、江戸時代末期の藤林普山が *A. rotunda* を蝮蛇にあてた背景には、テリアカにはマムシが欠かせないという見方が存在していたと推測される。

ギリシャ、アラブ医学などにおいては、毒へびを入れたテリアカは初期の時代のものに見られる。たとえば、最も古いテリアカであるアンドロロマクス(二世紀)のテリアカがこれに該当する。しかしながら、毒へび類の使用は時代が下るにつれて、姿を消していく傾向にある。た

えば、アラブ医学のマイモニデスの解毒薬についての著作(一九八年)においても、同書が記す単味の解毒剤、一六〇種類の中に毒へび類は含まれていない。

日本が受容したテリアカは、その初期のものから時代が下ったものまで、雑多であるにもかかわらず、全体的には蝮蛇が入った処方が多い。この理由の一つとして、蝮蛇に悪瘡を治す作用があるところから、*Viper*(クサリへび)の訳としてだけでなく、*Aristolochia*などの代用薬であったともみられる。なお、中国の本草書には、今日日本で使っているマムシの強壯薬的な使い方は見られない。日本におけるマムシの幅広い応用は、あるいはテリアカの受容にも関連していると推測される。

(東京理科大学薬学部 薬用植物・漢方研究室)